

令和3年第17回教育委員会会議

1 日 時

令和3年12月17日(金)

開会 10時

閉会 10時52分

2 場 所

県庁行政庁舎 17階 教育委員会室

3 出席者

徳田博教育長、新屋長二郎委員、新家久司委員、眞鍋知子委員、高野勝委員、浅蔵一華委員

4 説明のため出席した職員

飯田重則教育次長、杉中達夫教育次長、塩田憲司教育次長、松田豊久教育次長兼庶務課長、江尻祐子教育次長兼学校指導課長、岡橋勇侍教職員課長、清水茂生涯学習課長、山下幸則文化財課長、居村吉記保健体育課長

5 議案件名及び採決の結果

議案第39号 文化財の県指定について（原案可決）

6 報告事項

本年度のGIGAスクール構想実現に向けた県教育委員会の支援状況について

7 審議の概要

・開会宣告

徳田教育長が開会を告げる。

・質疑要旨

以下のとおり。

議案第 39 号 文化財の県指定について（山下文化財課長説明）

1 の提案理由であります。先月 26 日の教育委員会会議で文化財保護審議会に諮問することをお諮りしました文化財 2 件につきまして、先月 29 日に開催されました同審議会において「文化財に指定することが適当である」との答申を得ましたので、答申どおり指定することをお諮りするものでございます。

2 の根拠法令等は、記載のとおりでございます。

3 の指定する文化財であります。いずれも有形文化財で、彫刻の「木造随神坐像」、考古資料の「西念・南新保遺跡出土品」以上、2 件でございます。

それぞれの文化財の詳細について、ご説明いたします。まず、「木造随神坐像」についてであります。員数は 2 軀 1 対、所在地は七尾市中島町にあります中島お祭り資料館・お祭り伝承館、所有者は七尾市中島町の久麻加夫都阿良加志比古神社でございます。指定理由につきまして、3 ページをご覧ください。本像は、久麻加夫都阿良加志比古神社の薬師社に安置されていた 1 対の随神像であります。弘安 6 年に神社の社殿が修造された棟札が残り、社殿に続いて門が建立された際に、本像も造られたと想定されております。また、表面の風化が著しいことから、これらがかつて門に安置されていたことを示すものであります。両像とも、針葉樹材の一木造で、頭軀幹部は一材ですが、顔は前部で割り、玉眼を内側からはめこみ、両肩、膝前、脊部は別材を組み合わせしております。彩色はほとんど剥落しているものの、四肢のつながりが自然で、衣のしわは体の動きに応じて刻まれ、その質感をよく表しております。以上のように「木造随神坐像」は石川県内の随神像の中でも技術・造形とも優れており、貴重な随神像であることから、文化財指定することが適当であるとの答申を頂いたものであります。なお、参考資料として、4 ページに写真を添付してございます。

次に 5 ページをご覧ください。「西念・南新保遺跡出土品」についてであります。員数は 600 点、所在地は金沢市上安原にあります金沢市埋蔵文化財センター、金沢市新保本にあります金沢市埋蔵文化財収蔵庫、所有者は金沢市でございます。指定理由につきまして、6 ページをご覧ください。西念・南新保遺跡は、金沢市の沖積平野の微高地に立地する弥生時代から中世にかけての複合遺跡であります。発掘調査により、弥生時代の遺構として建物跡や井戸跡、墓などが発見されまして、当該時代の土器、木器、石器、金属器等が出土しており、加賀北部の中核的な集落と位置付けられております。出土品のうち、土器は保存状態が良好で、基準的資料として高く評価されており、「鹿」と「建物」を描いた絵画土器は、豊作を願う弥生時代の精神世界の一端を示しております。また、木器は農具等、多種多様な道具があり、当時の木工技術の高さを示しており、中でも盛り付けの器である高杯は、杯部外面に六葉の浮き彫りがあり、全体を赤く染めた後に杯部内面に黒漆を施した精巧品であります。以上のように「西念・南新保遺跡出土品」は、北陸の弥生時代中期から後期にかけての生活・技術・交流・文化をよく知ることができる代表的な考古資料であることから、文化財指定することが適当であるとの答申を頂いたものであります。

なお、参考資料として、7 ページから 10 ページにかけて、出土品の内訳、写真を添付してございます。

1 ページをご覧ください。4 の指定の日につきましては、県公報の告示の日となっており、本委員会でご承認いただければ、12 月 24 日の県公報に登載の手続きを行い、告示したいと考えております。

【質疑】

質疑なし

(徳田教育長)

採決を行う。

(各委員)

異議なし

報告事項 本年度のGIGAスクール構想実現に向けた県教育委員会の支援状況について（江尻教育次長兼学校指導課長説明）

今年度、小中学校におきましては、児童生徒1人に1台、高校においては、3クラスに1クラス分の端末が整備されております。来年度、高校には、小中学校と同様に生徒1人1台の端末が整備される予定であります。小中学校では、当初多くの公立小中学校で試行錯誤しながら、教員、児童生徒の双方が端末に慣れていく導入期の段階でしたが、現在、2学期末になりまして、いくつかの学校で授業の中で効果的に活用していくという活用期の段階へ入ってきていると捉えています。委員の皆様に見ていただきました羽咋市の学校などは、活用期の段階に入っている学校の一つとなります。高校でも、委員の皆様に見ていただきました大聖寺高校は、積極的に活用している学校の一つですが、高校自体が3クラスに1クラス分の整備ということもありまして、使っていこうという導入期の段階と捉えています。このような状況の中で学校をどのように支援してきたかについてご説明いたします。

まず教員総合研修センターの取組をお話します。本年4月に新たにGIGAスクールサポート課を設置しまして、端末を活用した授業力の向上に対する体制を整えました。また、校長をはじめとした管理職がしっかりと推進していくという自覚をしなければならぬということで、3月末に学校トップの意識改革を図る校長研修を実施し、4月早々には副校長、教頭などの研修、そして4月と9月には校内研修を牽引していく、実質的な役目を果たす推進リーダーを対象とした研修を行ってまいりました。

また、GIGAスクール構想実現に向けての各学校の課題点が様々でありますので、各学校のニーズに応じて指導主事が学校現場に出向いてサポートするというGIGA出前サポートを実施しまして、各学校の校内研修をきめ細かくバックアップしているところです。表にもございますが、11月末現在で、このGIGA出前サポートは91件の研修を実施しており、今後17件予定しております。内容につきましては、当初は一番下にあります、ChromebookやiPadなどの端末の使い方の要望が多かったですが、現在は端末を活用した授業づくりを中心とした研修が多くなっており、内容も変化してきているところです。こうした出前研修は現場から大変好評でありまして、今後も各学校のニーズに応じた内容で継続してまいりたいと思っております。

次に、小中学校に対する支援についてです。小中学校では、13校をモデル校に指定しました。モデル校には、基本的操作の授業動画を夏までに13本、その後、端末を効果的に活用している授業動画を39本、合計52本を作成してもらいまして、その授業動画を教員専用のwebサイト、スマートスクールネットに掲載しております。後ほど委員の皆様はこの動画のうち、小学校の分を1本、中学校の分を2本ご覧いただこうと考えております。このスマートスクールネットに掲載した動画は12月1日現在で5,540回の視聴があるところです。また、モデル校には公開授業を実施してもらっておりまして、オンデマンドやライブ映像などで、各教育事務所管内の小中学校に授業を公開しました。

またGIGAスクール連絡会というものを開催しております。今日の午後も第4回目が開催される予定でして、これは各市町がそれぞれ抱える悩みや課題について議論したり情報交換をしたり、また情報モラルや持ち帰りのときのトラブルの対応などについて細かくお互いに情報交換して、良いものを学び合うという機会になっています。これも各市町からは大変有意義な会であるとのご意見を頂いているところです。

次に、高等学校に対する支援についてです。高等学校では、大聖寺高校の他、野々市明倫高校、鹿西高校の3校をモデル校に指定しまして、その第1学年の生徒に1人1台の端末を整備して、授業方法、活用方法を研究しているところです。モデル校では9月から今月にかけて、他校の先生に参観を呼び掛け、公開研究授業を実施しております。3校で延べ185名の先生が参観に来ております。参観した先生からは、「生徒からの意見を素早く集め、一斉に表示して考え方を共有する場面や、一人一人が端末を操作して、グラフや図形を動かしたり、繰り返し映像を見たりすることで思考を深める場面などで、端末の活用が有効である」などの意見があったと聞いております。引き続きそのような取組をしてまいりたいと思っております。

それから、特別支援学校に対する支援ですが、ろう学校、いしかわ特別支援学校、医王特別支援学校の3校をモデル校として指定して、障害特性に応じた活用の仕方について研究しているところです。例えば、ろう学校では、文字情報を素早く提示できる機能や、音声をリアルタイムで文字にする機能を活用して動画に字幕を付けるとか、一般の人へのインタビューに使うということを実践研究していると聞いています。また、いしかわ特別支援学校では、肢体不自由、知的障害のある児童生徒一人一人の障害に合わせて、一番いい支援機器、アプリなどはどんなものがあるかということを検討していき、それを使うことによって、生徒同士がお互いに学び合う場をつくらうという研究をしているということです。医王特別支援学校では、医療機関で病気療養中の児童生徒が、在籍する学校の授業を同時双方向的に受ける仕組みづくりについてまとめているということです。今後、それらの事例等を集めて他の学校に周知していきたいという取組であります。

何分にも、今、効果的なものというのは、まだごくわずかでありまして、いかにこれからより効果的にしていくかということが課題です。また、中学校、高校というのは、教科の特性があり、教科担任制ということもありますので、小学校とは違う取組といった視点で来年また進めていきたいと思っております。これからが本番と自覚しまして、GIGA スクール構想の実現に向けて、より深めて、またよりきめ細かく推し進めていきたいというふうに考えております。

長くなりましたが、今ほど申しました事例を幾つか動画で見させていただこうと思っております。ご覧いただいてから、またご意見を賜りたいと存じます。

(動画を視聴)

- ・能美市立浜小学校 4年生 国語
- ・羽咋市立羽咋中学校 1年生 英語
- ・能登町立能都中学校 3年生 理科

【質疑】

(高野委員)

GIGA スクールサポート課の出前サポート 91 件について、校種ごとの内訳は分かりますか。

(江尻教育次長兼学校指導課長)

小学校と高校がそれぞれ 30 から 40、中学校が 10 弱です。

(高野委員)

慣れるための導入の内容から、活用に移っているというお話ですし、今後も十数件予定されているということですが、その出前サポートに変化はありますか。やはり活用を中心としたことに関する出前の要望でしょうか。

(江尻教育次長兼学校指導課長)

そうです。操作に慣れてまいりましたら、授業の中でどう使うかというところに移っていきますので、端末のことだけでなく、教科の授業づくりというような要望になってきています。

(高野委員)

出前サポートやいろいろな研究など大変だと思いますが、校内の研修推進リーダーがいらっしやって、その方を中心にやられているとのこと。そのリーダーの方の習熟度はどの程度のものでしょうか。

(江尻教育次長兼学校指導課長)

その学校の中で一番習熟しているであろう先生を中心に組んでいます。学校の規模にもよりますが、その先生一人に頼っていても進みにくいことですので、それに加えて、各教科主任、教科、授業のうまい先生と一緒に組んで進めています。

(杉中教育次長)

推進リーダーについては、多くの学校で、1人ではなく、複数をリーダーにしたり、チームを組織したりという学校が多いです。一般的には、学校の中で若手の先生が情報機器に強いというところがあります。年配の先生はどちらかというと少し後れを取っているのですが、では授業がうまいのはどちらかというと、ベテランの先生の方がやはり授業がうまいということがあります。情報機器の得意な若手と、授業の上手なベテランの方がチームをつくって学校で指導されている事例を見ております。

(新屋委員)

先ほど、4月や5月に推進リーダーの方の負担がちょっと多いのではないかという話がありましたが、徐々に皆さんが使っていくことに慣れていくと思いますので、任せきりにするのではなくて、リーダーの複数化であるとかチームでやるという形で、使っていく中で全体の力量が増していく形で進めていただければと思います。

(高野委員)

GIGA スクール構想をスムーズに進めるには、やはり ICT の支援員が必要かと思うのですが、退職された方や、企業からの派遣という話もありますが、学校図書館を活用するときに、図書館の司書補を配置したように、正規の職員という形で若手から継続的にずっと仕事として学校に勤務するような形で、人材を採用することは難しいのでしょうか。

(杉中教育次長)

今、各市町において、ICT 支援員という方の雇用はほとんどの市町でされています。当然これは市町が採用、運用していくということになり、これまでは、例えばベネッセなどの会社から派遣をしていただくというような形でしたが、なかなか任用をたくさんできないというのが現状だと思います。多くの学校では、月に1回であったり、2回であったり、週に1回来てくれればよいという状況で、タイムリーに問題を解決できないというところが各学校での課題であると聞いております。そうしますと、そういう方がいらっしゃらないと、先ほど新屋委員からもありましたけれど、ICT の得意なリーダーのところにはいろいろな質問が集中して、その方が大変多忙になるというようなことも聞いておりますので、そういったことに対して市町も何とかしなければいけないと考えているところだと聞いております。

(高野委員)

学校の事務職のような形で採用していくという方向性は、全くないということでしょうか。

(徳田教育長)

民間会社になかなか適任がいけないということもいろいろな市町から聞いています。今年の秋に、石川県の IT 企業の OB の団体に対して、ICT 支援という仕事があるので、どうかやっていただけませんかということをお声掛けしたら、既に、かほく市で OB の方が十数名来られて、学校に毎日、半日勤務する体制になっているのです。

その現場で ICT 支援の方と話をしてきたのですが、本当にやりがいがあるし、学校側にとっても非常に助かると。ちょっとしたトラブルが、メーカーに依頼する必要があるトラブルなのか、あるいは設定のミスでトラブルなのか、あるいはこんなことをやってみただけだけれど、どのソフトを使えばいいのかというようなことで、技術的なこと以外も、ソフトの話も対応できるということで、非常に学校と ICT 支援の人が良い関係でやっているとのことでした。これは好事例だと思いますので、こういった取組を他の市町もされたらどうですか、つなぎは県教委がやりますと市町にお伝えしています。ICT 支援員を配置するということは、GIGA スクール構想をスムーズに進めると同時に、教員の働き方改革にもつながるということですが、なかなか適任の人がいるというわけではないので、石川県は石川県なりの工夫をしたいと思います。市町もいろいろなネットワークを使って、いろいろな適任の方を捜しておられる。ただ、GIGA スクール構想を進める上で、やはり ICT 支援員の存在というものがないと、皆さん教員に非常に負担がかかってしまいますので、外部人材というのは非常に大事な役割ではないかと思っています。

(高野委員)

デジタル教科書と紙媒体の教科書はどのような位置付けになるかまだはっきりしていないのですが、持ち帰りがどこまで認められるかという、この部分にかかってくるのではないかなと思います。Wi-Fi の環境であったり、インターネット上のリスクだったり、いろいろあるのですけれども、持ち帰りに関してはどのような方向で考えられているのでしょうか。

(杉中教育次長)

各市町の状況を見ますと、休業期間ではなく、普通の授業日のときに、ほとんどの市町が何らかの取組をしているようです。ただし、その頻度は各市町や学校によってかなり状況は違うようです。

持ち帰りに関しては、端末を貸与するときに、持ち帰りした際にどういったことに気を付けなければならないか、保護者との間で教育的なルールの確認をしています。また、学校から与えた端末をご家庭で利用していただくということになりますと、どうしてもいろいろなトラブルも考えられますが、端末の設定でアプリを自由に入れることができないような仕様になっています。一部の市町では使用時間を設定して、夜9時以降だとか、10時以降になると自動的に使えないという形で使わせていると聞いております。各市町とも、いろいろな規制等をしたり、教育的な指導をしたりしながら、持ち帰りでも使わせているということですが、何らかの目的で今日はこういう宿題があるから、これを家でやってきなさいということで持ち帰りをさせていることが多いと聞いております。

(新家委員)

ICT研修の話ですが、会社でもハード的に電源が入らなくなったとか、ソフトが急に止まったとかいろいろあります。急な話が多いので、こういったSOSに応える社員がすごく忙しいです。教育長からもご説明があったとおり、いろいろな企業団体に支援をお願いするのもそのとおりだと思います。

1点目です。ちょっと話は変わりますが、私はPTAにいたものですから、私が会長をしていたところの小学校のホームページを見ていたのですけれども、働き方改革に伴って、小学校のホームページもだいぶ変わったように思いました。いわば地域の方に協力を求めるような仕組みになっていました。PTAの方にも、情報セキュリティの問題など、こういう事情があつて親御さん等々にもご協力いただきたいと、親御さんにも協力を求めてはどうでしょうか。されているとは思いますが、またそういったことも考えられたらいかがかなと思いました。

2点目です。以前、大聖寺高校にお伺いしたときにもお話をしたのですけれども、今、高校生はほとんどがスマホを持っていて、私はタブレットと聞いたときにタッチパネルだけかと思ったのですけれど、キーボードも付いていました。タッチパネルで文字入力するよりもキーボードの方が早いのです。ですから、小学校の高学年ぐらいでゲーム形式にしてキーボードを使って入力をするなど、何かそういった取組があつた方が良くと思います。入力のスピードによってタブレットを活用する能力が変わってくるので、そこにギャップが出てくるのはいかがなものかなと思いました。

3点目ですが、GIGAスクール構想ではいろいろな授業改革をして、子どもの理解力を上げるということが、最終的な目的なのだろうと思うので、やはり結果として子どもたちの学力が上がらないといけないだろうなと思います。授業の中身が変わって学力が上がったかという検証は、どこかで必要なのではないかなと感じます。

(杉中教育次長)

情報セキュリティなどに関して、ご家庭と連携をして進めていくということは、どこ

の学校でも大事に思っていて、課題と思っていると思います。

貸与する際に各市町がやっておりますのは、端末をどのような使わせ方をしますということで、学校と保護者との間に確認書のようなものを作成し、保護者にサインをいただいています。また、児童生徒本人とも、こういった使い方をすることを約束しますとサインをさせて、端末を預かるということに責任があることを明確にして扱っていただいています。ただ、ゲームなど違うことに使っていたという報告例も実際にあるので、そういう個別の対応も同時にやっています。また、学校の情報セキュリティであったり、リテラシーであったりといった教育についても、教員がまず自らきちんと勉強をしないとイケないところもありますので、そういった研修等々もしていく必要があると思っています。

2点目のキーボードに関わる部分ですが、小学校では3年生でローマ字を勉強いたします。それを習いますと実際にローマ字入力をしていきます。現場の声をお聞きしますと、低学年の1、2年生は、どちらかという文字入力よりも手で書いたり、写真で撮ったりということに多く使っているのですが、3年生以上になりますと、授業以外の部分でも文字入力させる機会を多く持って子どもたちに指導している聞いていますが、子どもによってかなり差があるとのこと。できる子がいれば、全く初めてだという子もいるので、少し個別に対応しているという話を聞きます。

3点目の、本当にこの取組が学力につながっているかというところは、まさにそのとおりであります。

(眞鍋委員)

学力が本当に上がっているかという点に関しては、今日の動画を見ていて、やはり現場でやっていらっしゃることが、私たちが受けてきた教育と変わっていると感じました。最初の授業は「え、これ国語なの？」という授業でしたよね。ですので、入試する側もこういう教育を受けてきた子どもたちに対応した、入試の改革を進めていかなければいけないです。大学でも暗記科目だけで良い点を取った生徒を入れるのではなく、新しい多様な入試の方法を、今どんどん開発しているのですけれども、こういう教育を受けてきた子どもたちが身に付けてきたものを、きちんと評価できるような仕組みを用意していかなければいけないだろうと思いました。

また、キーボードの習熟に関しても、私もパワーポイントで授業をするのですけれど、それを事前にネットワークに全部載せておきます。学生は1人1台パソコンを持ってきて、パソコンでパワーポイントの画面を見ながら授業を受けるのですが、その後最後に10分ぐらいで授業の感想や課題を出して、それも入力させるのですけれど、その入力の段になると、急に携帯を出してスマホで感想などを書き出す子がすごく多いのです。彼らにしたらキーボードを打つよりスマホの方が速いということで、過渡期の状況かなと思うのですけれど、やはり小学校3年生ぐらいからきちんとキーボード入力を身に付けていただきたいなと思います。

また、別の視点としては、通信環境の問題があると思います。今は学校にWi-Fi環境を整えられたと思うのですけれど、うちの大学でも、例えば新学期の授業の科目を登録するときに、ネットワークに学生からのアクセスが集中してしまっていて、全然入れなくなって困ることがあります。そういった状況は現場ではないのでしょうか。

それから、動画でありましたが、先生がGoogleフォームで評価をさせたりしている

と、あれは教材を先生が作っていらっしゃるわけですね。そういった教材がどの程度他の先生と共有できるのかということが重要ではないかと思います。私もああいったものを作ったりするのですが、大学は教えていることが私と他の先生で違いますのでほとんど共有しません。一方で、小学校や中学は同じことを教えていらっしゃるから、教材の共有を、この ICT 化でどれぐらいできるのかをお聞きしたいです。

それから、以前、大聖寺高校と特別支援学校を見に行っただけですけど、特別支援学校では Chromebook ではなくて iPad を導入されていて、それは非常に効果的だなと思いました。やはり iPad は iPad のデザイン性に優れたアプリケーションが得意ですので、とても良かった、評価できるなという点です。

また、先ほどの説明で、特別支援学校の入院されている方でも授業を双方向的といった話がありましたけれど、すごく不登校の生徒さんが増えている状況ですので、例えばそういう方にこの ICT を使った教育の工夫ができるかどうか、今、どんな試みがあるかどうかを教えてください。

(徳田教育長)

通信環境について、県立高校の場合を申し上げますと、令和 2 年度にこういった 1 人 1 台に対応した通信環境を、普通教室では全部整備しました。ただし、高等学校の場合は来年に 1 人 1 台になるので、もしトラブルが出たらしっかり対応します。

小中の話を聞きますと、ある学校はどうしても不具合があるということで、それは対応しなければならぬと言っています。基本的には GIGA スクール構想が始まる時に国からもいろいろな支援措置があったので、高速ネットワークの環境整備について最低限はできているのではないかと思います。ただ、学校によって状況が違いますので、もし不具合があれば、GIGA スクール構想の土台になりますので、対応していかなければなりません。

(杉中教育次長)

いろいろな教材であったり、アンケート機能であったりの共有ですけども、本当に大事なところだと思います。例えば中学校であれば、教科部会などで共有して同じものをみんなで使っていくというようなことをすると、子どもたちも慣れているし、先生方の業務改善にもつながっていきますので、今後、良好事例を学校として、あるいは市町としてきちんとストックして行って、いいものは使っていくべきと思っています。

それから、不登校児童の同時双方向の授業ですが、市町全体の取組となっているところはないと思います。ただ、一部の学校で、授業を自宅で見たり、あるいは教室には入れないのだけれど、相談室には入れるという子どもが、相談室で授業を見て参加したりというような例は一、二あるように聞いております。

(江尻教育次長兼学校指導課長)

先ほどの医王特別支援学校の授業ですが、中学部などで、前に籍を置いていた中学校の様子を知りたいとか、あるいはその学校に戻るときに、交流したり、授業の様子を見て、自分がまた戻るのだなということで活用したりと聞いております。また、病棟にいる子ども同士で、病室が違うのですが、その病室と病室をつないでみんなで学べるようなものを工夫して取り組んでいくようにしています。

不登校に関しては、高校の状況を申しますと、仮に授業を自宅で見ている出席にはならないので、そういった難しさがあります。

(新家委員)

会議が始まる前に、眞鍋先生と最近の大学の講義の在り方の話をされていて、今よく聞くのがハイブリッドです。対面とオンラインの大学の授業で、ビデオを撮ってそれを生徒が見て、それに対してレポートを書いて講義に代えるのです。そういったことが大学の授業の中では入っているの、高校の不登校の生徒についても、そうやってレポートを出せば出席を認めていくような形も、一つあるのかなと思いました。

(江尻教育次長兼学校指導課長)

ありがとうございます。

(浅蔵委員)

私も、子供たちが思ったより上手に、だんだん使いこなせてきているのかなと思っています。持ち帰りについて、どんな課題や宿題をさせるために持ち帰らせているのか気になります。また、以前視察した、大聖寺高校でも思ったのですが、全部タブレットの中で打ち込んで、それを学校に置きっぱなしで持ち帰らないという状況で、復習のときにどうしているのでしょうか。ノートの取り方が上手かどうかで、学力なども少し差が出てくるのか思うのですが、それが全部タブレットの中で保管されていて、プリントアウトもせず、そのままになっていたら、テスト前はどうするのだろうと思ったりします。ですから、タブレットだけでなく、自分の手で書くことも併用していかないと、英語だって読めるけれどスペルが書けないなどが出てきそうな気がします。先ほどの動画のような、理科の実験などは動画をスローモーションで見たりすると分かりやすいと思うのですが、全部タブレットではなくて、手を使ったりアナログであったりも、何かして行ってほしいなと思いました。

(杉中教育次長)

現場から聞いた話ですが、小中学校では、ドリルであったり、それから調べ学習の際に家に持ち帰って、通信機能を使っていろいろな調べ学習をしてレポートにまとめたりしています。その他に、家庭の風景などの写真を撮って、その写真に対して、いろいろな詩を作って、その詩を写真の上に重ねて書いたりとか、そういうことをするための素材集めを家でさせたり、最近は授業でプレゼンの機能を使って発表をしていますので、発表資料を家でじっくりと作らせたりということに使われていると思います。ただ、それも毎日あるわけではないので、そういうことが必要なときに持ち帰らせるのではないかなと思います。

それから、ノートの使い方ですが、これも幾つか小学校を見た中で感じたことなのですが、ある小学校はプレゼンを作ったら、まとめも全部その中に入れ込んでしまって、後からそれをプリントアウトして、自分のノート代わりになるような使い方をしていました。また、ノートはやはり大事だから、ノートにしっかりまとめをして、そのノートをカメラ機能で撮って、先生に提出するというように使っている学校もあったので、まだ現場もいろいろ試行錯誤をしているところかと思っています。

(新屋委員)

先ほど3本動画を見させていただきましたけれども、こういうコンピューター、端末がなかった時代の授業と比べて、すごくいい点が見えてきた動画だったかなと思います。

先ほどから話題になっていますが、そういった授業をしていくことで、学力が付いたかどうかということは今後の検証になると思うのですが、求められているものも違ってきて、もっともっといい使い方が皆さんに広まっていく段階だと思います。先月、学校視察で見させていただいた小学校と中学校、高校と、ごく短時間ですけれど、同じような使い方をしていました。それはそれでいいのですが、他にも使い方はいろいろあるだろうなと思います。これからどんどん取組を進める際に、ワンパターンになってしまうのではなくて、何か自分なりの工夫をして、いい授業をする人が出てくるとと思います。そういったものを教材の共有化などで、どんどん広げていってレベルアップしてもらえばいいかなと思います。

(高野委員)

感想なのですが、先月、羽咋中学校を視察して素晴らしいなと思って見ていました。その羽咋中学校の中で一番感動したのは職員室です。前を通ったときにこれはパソコンルームかなと一瞬思ったのです。いろいろな校務処理がICT化されている中で、職員室の机の上というのは本当に50年前とあまり変わらないような学校が多いと思いますが、机の上に書類が無く、パソコンのディスプレイだけにして帰っているような先生が多いではないですか。その部分で、職員の意識が結構変わっているのだなということを感じました。

(徳田教育長)

ありがとうございました。4月から始まってある程度GIGAスクール構想が進みましましたので、今回こういう形でいろいろな意見を頂きました。まさに各学校が試行錯誤しながら進んでいるという状況であります。それで、どういった支援の在り方がいいのかは、まだ確たるところは分かりませんが、今年度は使ってみようという段階から、来年度は、教科ごとにより細かく深くやっていくという形になっていくと思います。

・閉会宣言

徳田教育長が閉会を告げる。